

平成18年度環境科学センター研究推進委員会指摘事項への対応

課題名 相模湖・津久井湖の水質汚濁の実態解明

主な指摘事項	環境科学センターの対応
<p>○負荷量調査に基づいて、対策につなげるということだが、その対策が見えてこない。具体的にどう考えているのか示してほしい。</p> <p>○N・Pの濃度は昔から高かったのか。</p>	<p>○上流県での発生が8割以上であることから、栄養塩類の具体的な削減対策は現時点では非常に難しい。例えば、これまでの室内実験では、紐状の濾材を筏に吊り下げた生物膜浄化処理装置を湖面に浮かべて処理した場合、湖水の窒素濃度を1割除去しようとする、湖面積の1%以上を占めるくらいの筏を浮かべなければならない。</p> <p>○アオコを発生させないための抑制対策として、エアレーション装置による対症療法をやっている。負荷量削減対策が難しいならば、処理等のトータルで対策を提案していきたい。場合によっては、物理化学的処理も考えていく必要も出てくるかもしれない。</p> <p>今回の負荷量調査は、対策の具体的な取組内容を決めるために、流域全体の排出源別負荷量調査を行おうと考えている。</p> <p>○昭和40年代以降は横ばい状態だが、昭和30年代はNもPもそれより低かった。相模湖における無機態窒素は昭和30年代に0.4~0.5mg/Lだが、昭和40年代には0.7~0.9mg/Lに上昇。リンは全リンのデータはないが、リン酸イオン態リンでは昭和30年代0.01~0.04 mg/Lに対し、昭和40年は0.02~0.09 mg/Lに高まっている。(出典：横浜市及び川崎市水道局による相模湖流出水の水質データ(1954-1972))。</p>

平成18年度環境科学センター研究推進委員会指摘事項への対応

課題名 相模湖・津久井湖の水質汚濁の実態解明

主な指摘事項	環境科学センターの対応
<p>○負荷量調査は何回も行っているが、どこが不足しているのか。</p> <p>○計画書の中では「水質」だけでなく、「水量の確保」といっているが、利水の仕方はどうなっているのか。</p> <p>○上流域である山梨県側との協力体制はどうなっているのか。</p>	<p>○自然系で明確でない部分があり、その点を定量化したい。次の点が不足している。</p> <p>①リン汚染原因の究明：相模川流域のリン負荷量の大半は富士山の玄武岩由来との報告（山梨県）があるが、H16年度の調査ではその点の確認が行われていない。H13年度の事業ではリンの調査は全く実施していない。</p> <p>②窒素負荷量に対する大気由来寄与の解明：H13年度では、自然系由来負荷量の内の約6割が大気由来であることを報告しているが、これは当該調査の限られた小数データの知見で出した結論であり、今後、ダム湖の窒素汚濁負荷改善の視点から大気汚染対策を推進するには、その点のデータ不足を補強した形でさらに詳細な検討をする必要がある。（乾性成分による負荷量の把握）。</p> <p>○利水の概要は把握しているが複雑である。例えば、東電が発電用に人口水路で取水しているが、その正確な水量水質のデータが入手できていない。できるだけ精確な調査とするためこれらのデータも入手するよう努力したい。利水状況の概要は企業庁等の資料により把握している。</p> <p>○現在、正式な協力依頼はまだだが、個人的に山梨県衛生公害研究所の方とコンタクトをとっているところである。</p>